

---

# 決闘のご褒美は痛いんですか？（僕は使い魔？最終話）

鷹嶺綺羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

決闘のご褒美は痛いんですか？（僕は使い魔？最終話）

### 【Nコード】

N1984D

### 【作者名】

鷹嶺綺羅

### 【あらすじ】

キュルケと口論になったルイズは、決闘に望む！賞品はとんでもない代物で……。僕は使い魔？シリーズ最終話ですつ。

「絶対イヤっ!」

室内にルイズの声が響き渡った。

「ふざけないでよ!」

「あらあ? 私はホンキよ?」

キュルケがそう言った。

「とにかく!」

そのキュルケに、ルイズが噛みついたのも無理はない。

「離れなさいっ!」

ルイズの部屋に来たキュルケは、水瀬の勧めた椅子に座っていない。

水瀬の上に座っているのだ。

それが、ルイズには面白くない。

「小鳥一匹だつて、あんたに盗られてたまるもんですかっ! ご先祖様に申し訳が立たないじゃないっ!」

「そこまで言う?」

むしろ挑発するか如く水瀬にしなだれかかるキュルケ。

「だからあ。夜だけ貸してつて言ってるの。どうしてダメなの?」

「私の使い魔なんだからっ!」

「夜の相手までさせてないでしょ?」

「あつたりまえよっ!」

ルイズは言葉の意味を理解して、赤面して怒鳴った。

「なんで使い魔相手に!」

「ふうん?」

まるでルイズの内心を知り尽くしたかの如き表情のキュルケが、自分の唇を、水瀬の唇に重ねようとした。

「きゃーっ! ダメダメッ!」

両手をバタバタさせて拒絶を示すルイズ。

「この人、私のご主人様なの。わかる？ルイズ」

「わかってたまるもんですかつ！」

「お子ちゃま」

「イロボケっ！」

「あのお……」

水瀬が発言を求めるが、エスカレートする二人は全く取り合わない。

かなりの言い合いの後、キュルケが言った。

「そろそろ、決着をつけませんか？」

「そうね」

「あたしね、あんたのこと、だいつきらいなのよ」

「気が合うわね」

キュルケは微笑んだ後、目をつり上げた。

ルイズも負けじと胸を張った。

雲形定規と普通の定規を並べたような光景を前に、水瀬はため息をつくしかない。

その水瀬の前で、二人は同時に怒鳴った。

「決闘よ！」

「勝った方が、今夜、ミナセに抱かれる。それでいいわね？」

そのキュルケの言葉に、ルイズは真顔で返した。

「当然っ！」

決闘の方法はいろいろある。

だが、これは勘弁して欲しい。

水瀬はそう思った。

今、水瀬は縄で縛られ、宙ぶらりんの状態で本塔のてっぺんから吊されている。

これが決闘？

二人で僕を殺すつもりの間違いじゃない？

水瀬のそんな疑問を余所に、キュルケが言った。

「いいこと？ヴァリエール。あのロープを切って、ご主人様を地面に落とした方が勝ちよ。いいわね？」

「わかったわ」ルイズは硬い表情で頷いた。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらいはハンデよ」  
「いいわ」

「じゃ、どうぞ」

そりゃ無理だ。

水瀬はそう思った。

普通の魔法使いなら問題はないことだが——あのルイズだ。  
魔法を放つ放たないの前に、使えるかどうかなのだから。

ルイズは短くルーンを唱える。『ファイアボール』の呪文である  
ことは、もうミナセにもわかった。

詠唱が完了し、気合いと共に杖が振られる。

呪文が成功すれば、杖の先から火の玉が飛び出すはずが——  
突然、水瀬の後ろの壁が爆発。

爆発の影響か、ロープが切れ、水瀬は、そのまま地面に落下を開始した。

立ち会いのタバサが杖を振り、水瀬に『レビテーション』をかけてくれたおかげで、水瀬はゆっくりと地面に降りることが出来た。

「——やった」

自分のやったことが信じられない。

そんな顔で、ルイズは水瀬を見た。

「やったあつ！」

飛び跳ねて、終いには踊り出さんばかりの勢いで喜ぶルイズ。  
「爆発の破片でロープを切ったのね？」

キュルケは悔しそうに綺麗に切断されたロープを手にした。

「っ。しかたない——」

「そうよ！」

ルイズは胸を張ってキュルケに怒鳴った。

「私の勝ちよっ！」

「そう？それでいいのね？」

何故か、キュルケの顔が意地悪くなるのに、ルイズは気づかない。

「当然っ！」

「じゃ、今晚は諦めてあげる」

キュルケは、水瀬を縛っていたロープを解くと、立ち上がった。

「さっさと帰りなさいっ！」

シッシツと手でキュルケを追い立てるルイズ。

そのルイズにキュルケは、勝者の義務を告げた。

「じゃ——今晚、頑張つてね？」

「……えっ？」ルイズは、その意味がわからない。

「勝った者が、今晚、ミナセに抱かれる。——そういう約束でしょっ？」

「っ。」

ルイズは、愕然として去りゆくキュルケを見送った。

ルイズは、どうやって部屋に戻ったか覚えていない。

「本当にいいの？」

「あ……っ……」

心配そうに訊ねる水瀬に、ルイズは頷いた。  
その顔は、気の毒になるほど青白い。

「……」

そつ。

水瀬の手が、その肩に触れた途端。

「……」

まるで叱られる子供のように、ルイズが身を固くした。

「クスッ」

小さく笑った水瀬は、ルイズの肩に置いた手を、彼女の頭に置いた。

「やめよ？」

「——えっ？」

ルイズが驚いて見上げた水瀬の顔。

その目は、とても優しげに見えた。

「ほら。やつぱり、旦那様とか、一生通して大切な人と結ばれた方がいいでしょ？ こういうのって」

「……水瀬」

「僕、後悔してほしくないし」

水瀬としては、完全に善意だった。

そりゃ、水瀬だって目の前の美少女を一晩、好きにしていいたいわければ、あんなこととかこんなこととか、マックハートが燃え尽きるほどビートして、レストアされたのを高値で買い取って尚足りない微妙なお年頃ではある（意味不明）

それでも、目の前で震えている女の子を抱けるか？

成り行きでここまでできただけの子を？

そつ、聞かれれば、水瀬は迷わず否と答える。

そんなことする位なら——。

そんな水瀬の言葉を受けたルイズは、水瀬の全く予想だになか

った反応に出た。

「――だ」

うつむき、スカートを握りしめたルイズが、絞り出すような声で言った。

「……んだ」

「へ？」

聞き取れなかった水瀬が、ルイズに耳を近づけた途端。

バツチーンッ！

室内に乾いた音が響き渡った。

「ご、ご主人様っ！？」

吹き飛ばされ、思わず頬を押さえた水瀬の目の前で、水瀬をひっぱたいたルイズが立ち上がった。

「私とじゃイヤなんだ！」

怒りに赤く染まった顔。

普段なら、そこにはつり上がった目がある。

あるはずなのに――

違った。

その目は、傷つけられた者特有の哀しさに満ちあふれた目だった。

窓から差し込む月明かりが、ルイズの瞳に輝く涙を照らし出す。

「キュルケとは出来て、私とは出来ないんだ！」

「そうは言っていない」

「言ってる!」

「言っていない」

言ってる。

言っていない。

元からけんか腰のルイズに引つ張られる形で、水瀬もついつい感情的になってしまう。

何分が経過したのか。

「ぜえ……ぜえ……」

「はあ……はあ……」

互いに肩で息をしながら対峙する水瀬達。

「ゴホッ……喉、痛い……」

「僕だって……ゴホッ」

水瀬は、無言で部屋を出ていく。

「ちよっ……」

思わず伸びたルイズの手は、ドアの向こうに消えていく水瀬には届かない。

「……何よ」

ルイズは歯を食いしばった。

「何で、こんなに悲しいの?」

その答えは、自分自身が一番わかっている。  
侮辱?

違う。

そんなものじゃない。

ボフッ。

クッションの効いたベッドに腰を下ろし、ルイズは部屋を眺めた。  
月明かりに照らし出された殺風景な部屋にいるのは、ルイズ一人。  
いつだってそうだった。

ゼロのルイズ。

何もない部屋は、ゼロの名にふさわしい。

そう思ってきた。

そう、思うことにしていたんだ。

それなのに――

「何よ……」

ルイズは、何かを殴ろうと振り上げた拳を降ろした。

「女の子をここまで本気にさせておいて、何であんなこと言うのよ  
お……」

女の子として迎える記念日。

それはなし崩し的に来たものの、ルイズはそれを、内心で歓迎していたのだ。

ゼロ。

そう、嘲り笑われていた自分が一躍有名人になった。  
友達だって増えた。

全部、全部が使い魔のおかげ。

ミナセのおかげなのだ。

——お礼とか、賞品として体を差し出すつもりなんて毛頭無い。

ドタバタしてばかりだった。

大変だった。

恥ずかしい思いもたくさんした。

——でも、楽しかった。

その楽しさを与えてくれたのは、一人の男の子。

ルイズは、彼を使い魔だと、最初から決めつけようとして、結局、出来なかった。

——何故？

ルイズ自身が一番わかっていること。

気づいたときには、ただ、一人の異性としてミナセを見ていたから。

使い魔というモノとして、見ることが出来なかった。

ただ、それだけ。

主従関係から恋愛への階段が、あまりに急だったことは、何度も言うようだが、認める。

だけど、それをわかった上で、それでも、ミナセには、リードして欲しかった。

自分を、引っ張って欲しかった。

ボフッ

ルイズはベッドの上に倒れ込み、腕で目を覆った。

もう、一生忘れないだろう。

最悪の記念日だ。

ふっ。と、瞼が熱くなる。

自分が、何に泣いているのかわからない。

何もわからない。

どうやったら、声を上げて泣けるのかさえ――

すっ。

そんなルイズの額が、奇妙に熱くなった。

何だか、ほっとするような暖かさ。

「？」

見ると、何かがルイズの額に乗せられている。

「——カップ？」

起きあがると、いつの間にかルイズの横に、ミナセが座っていた。手には湯気を上げるカップが握られている。

「ミナセ？」

「——はい」

渡されたのは、ルイズのお気に入りのカップ。

「ミルク、切れていたの忘れてたから」

カップの中身は暖かいミルクだ。

「——ご機嫌取りのつもり？」

「何とでも」

ミルクは丁度良い暖かさ。

心の中の蟠りが溶けていくような、不思議な心地が、ルイズを包み込む。

互いに無言でミルクを飲み干した時、水瀬が言った。

「本当に、いいの？」

「えっ？」

自分の体が、ピクツと反応したことに、ルイズは気づいた。何がいいのか？

その意味を、知っているから。

「いいの？」

じっ。と見つめる水瀬の目。

普段なら、はり倒しさえするその顔を、ルイズはまともに見ることが出来ない。

「な……何で聞くの？」

思わずベッドの上に正座したルイズが言った。

「こついつの、オトコならリードしてよ！一々聞くなんて、マナー違反だって、どうして気づかないのよ！この馬鹿っ！」

「馬鹿って……」

「馬鹿馬鹿馬鹿っ！まだ足りないっ！？」

「もう十分です……」

苦笑しつつ、カップをサイドテーブルに置いた水瀬の両手が、ルイズの肩を掴んだ。

「えっ？」

ルイズは、自分の心臓の強さに感心した。

異性にぎゅっと抱きしめられて尚止まらない、その頑丈さに――  
|。

「もう、止めない」

耳元で囁かれる言葉の甘さが、ルイズの思考を止めた。

「今晚は、最後まで――」

「う、うん……」

震える手を、何とか水瀬の背に回し、その感触を味わう。

小柄だけど、ぎゅっと締まった体つき。

それだけで水瀬への思いが止めどなくあふれてくる。

「ミナセ――」

ルイズは、緊張と歓喜の中で瞳を閉じた。

「――来て」

ドッシーンッ！

派手な音を立て、水瀬は顔面から床に落ちた。

「??????」

脳細胞全部が？マークを点滅させる中、水瀬は誰かの靴を見た。  
明光学園の生徒の上履き。

しかも女子。

リノリウム張りの床の上、明光学園の生徒の上履き。

つまり――

「あれ？」

「……」

上履きの生徒は、返事さえしない。

ただ、何故か、ものすごく寒い。

クシュッ。

クシャミをした水瀬は、自分が下半身丸出しなことに気づき、慌ててズボンを履いた。

あの世界に忘れてこなくてよかった。

そう思った。

だけど――

惜しいことをした。

心底、そう思った。

あと一步でルイズと結ばれるってところで、水瀬は現実世界に引き戻されたのだ。

あのまま、ルイズと一緒にいてもいいかな？

水瀬は、少しだけ、そう思っていたのだ。

「スゴく残念だけど——あれっ？」

上履きの生徒が、自分に何の反応も示さないことに気づいた水瀬は、上を見た。

「……」

見ると、そこには美奈子がいた。

本棚などから見て、場所は図書室。

「み、水瀬君？」

「さ、桜井さん？」

「な……何があったか、知らないけど……大丈夫？」

「うん……あともう少し、戻してくれるのが遅くてよかったのに」  
「えっ？」

びつくりしたわよ！

という美奈子の説明によると、こうなる。

水瀬が姿を消した後の放課後、美奈子は校内中を探して回った（むこうの世界では優に一ヶ月以上が経つのには、ここでは半日も経っていないことになる）。

そして、美奈子は、水瀬が本に挟んだあのしおりが怪しいと睨み、人気のない図書室の一角で、しおりを外してみたら、水瀬が出てきたというのだ。

「どういうこと？」

「うん……つまり、このしおり、挟んだ本の主人公になれるらしいよ？」

「そんな馬鹿な」

「面白かったけど……途中で出てきて残念」

「ふうん？」

本を開こうとする美奈子の手から、水瀬が素早く本を奪う。

「……何か、やましいことでも？」

「ないよっ！うんっ！全っ然！」

「……ふうん？」

美奈子は言った。

「お願いがあるんだけど」

教室に戻った水瀬達に、綾乃が近づいてきた。

水瀬が行方不明だと知って、綾乃も心配していたのだ。

「よかったぁ」

胸を押さえて綾乃が安堵のため息をついた。

「また、どこかのオンナと浮気でもしてるかと——」

そう言う綾乃の顔が、疑惑の色を浮かべた。

水瀬の顔は蒼白だ。

「——悠理君？」

「そ、そんなことないって！ねえ、桜井さんっ！」

「そ、そうよ！」

何故か、美奈子が水瀬に助け船を出す。

「水瀬君、図書館に籠もりつきりで調べモノしてたんだって！」

「——ふうん？」

その時、水瀬が犯した致命的エラー！。

それは、南雲に呼び出された時、本を持っていかなかったこと。

帰り支度を始めた美奈子の目の前で、机をゴソゴソやりだしたのは綾乃だ。

「怪しいです」

綾乃は、水瀬の机の中身をひっくり返し、まるで爆発物が麻薬でも探す捜査官のように一つ一つを丹念に調べ始めた。

「本当、やましいことなんて」

「そうですか？桜井さんが……」

「私は何もしてないわよ！」

「ムキになるところがアヤしいですけど……」

友達を疑いたくない。

綾乃は、唯一残った、そんな理性に従い、机に中身を戻した。

バサッ

本が落ちたのは、その時だ。

「あら？」

綾乃が手にしたのは、ライトノベル。

「悠理君、こういうのも読むのかしら？」

「面白いわよ？それ」

「へえ？」

「瀬戸さんも、興味あるの？そういうの」

「妻として、夫が、どんな本を好むのかは知っておかなきゃペラッ。」

読み始めた綾乃だったが――

「み、水瀬君っ！」

廊下を疾走して来た美奈子が、職員室前でようやく水瀬を捕まえた。

「あとお願いっ！」

一目散に逃げる美奈子。

「へっ？」

廊下を駆け抜ける美奈子を見送った水瀬が振り返った次の瞬間――

ガンッ！

水瀬は机の直撃を喰らって吹き飛ばされた。

「????？」

問答無用で机を投げつけるような非常識は、この学校に三人しかない。

美奈子。

ルシフェル。

共に、もう姿がない以上――

「せ、瀬戸さん？」

どういつ理屈で投げつけたのか。

水瀬の目の前に、階段から下りてくる綾乃の姿があった。

「悠理君」

逃げようとした水瀬の首を鷲掴みにした綾乃が、水瀬の目の前に、あの本を突きだした。

「――これは……なんですか？」

それは、あの本だ。

本の中身が、すべて切り替わっている。

「あれ？」

主人公が、ミナセとなり、ルイズ達と繰り広げた日々が克明に小説化されている。

「へえ……？」

水瀬は、感心したように呟いた。

「あれ、こういう機能もあるんだあ」

つまり、ルイズとお楽しみは、いつで味わえるんだ。

これはいい。

うん。

おばあちゃんも、タマにはいいもの作るんだなあ。

「——言い残したいことは、それだけですか？」

余韻に浸ってる場合じゃなかった。

水瀬は、自分が地獄の閻魔同然の相手に首を鷲掴みにされていることに気づき、青くなっていた。

日々が克明につてことは、つまり……。

「小説の中でも死刑ですっ！」

職員室前だというのに、綾乃の一撃が水瀬にめり込んだ。

数日後。

綾乃の所に、ルシフェルから電話がかかってきた。

水瀬の姿がないという。

ついさっきまで部屋で本を読んでいたのに、姿が消えた。  
なぜか桜井さんとも連絡がとれない。

心当たりはないか？というのだ。

本を調べて下さい。

綾乃はそう言った。

特に、エッチな本を中心に。

「？」

水瀬の部屋に入ったルシフェルは、机のすみに嚴重に隠された一冊の本を見つけた。

タイトルだけでもワイセツな小説。

女教師と生徒の愛欲の日々がどうのこうの――

博雅君が読んでいたら殺すって感じの本だ。

「生徒が、女教師の――あれ？」

教師の名前が全て風間禱子と書き直されていた。  
水瀬の字だ。

「？」

ルシフェルのも持つ本から、しおりが一枚、床に落ちたのはその時だ。

ドンッ！

何故か、床に水瀬が転がっていた。

「ひどいよルシフェルっ！」

同じ頃――

「お母さん」

美奈子の部屋から葉子が出てきた。

「お姉ちゃん、どこにもいないよあ？」

美奈子の机の上には、しおりが挟まれたノートが一冊、風に揺られている。

何が書かれたノートか？

その答えは、誰も知らない。

（後書き）

楽天ブログにいただいた名無し様よりのご依頼がきつかけのこのシリーズ。お楽しみいただけましたか？

痛いっ！モノを投げないでくださいっ！おひねりは1万円からでお願いしますっ（意味不明）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1984d/>

---

決闘のご褒美は痛いんですか？（僕は使い魔？最終話）

2010年10月21日20時39分発行